

がんの治療後に現れるリンパのむくみ

リンパ浮腫とその最新治療を知る

身体のもくみを引き起こすリンパ浮腫

リンパ浮腫は、乳がんや子宮がん、卵巣がん、前立腺がんなど、リンパ節の切除を伴う手術や放射線治療、薬物療法などによって、体中を流れるリンパ液の流れが滞ることによって生じる。リンパ管に先天的な問題がある原発性リンパ浮腫も存在するが、いずれの場合も進行すると関節が曲げづらくなるなどの症状があらわれ、日常生活に支障を来す場合が多い。

よく耳にする「リンパ」は、体中に血液を循環させる動脈や静脈と同じように体内に張り巡らされたリンパ管を流れるリンパ液を指す。リンパ液は余計な水分や老廃物を回収したり、ウイルスや細菌を首や脇の下、鼠径部などにあるリンパ節に運ぶ重要な役割を果たしているが、このリンパ液が何らかの理由で特定の箇所にとどまり、その部位がむくんだ状態のことをリンパ浮腫という。

リンパ節の切除を伴う手術や放射線治療で生じたリンパ浮腫は、皮膚の赤みや痛み、熱感や発熱を伴う蜂窩織炎と呼ばれる合併症を引き起こす可能性がある。さらに進行すると、周囲の組織が繊維化し、皮膚が象のように厚く、硬くなる象皮症を発症することもある。

外科的手術の発達で治療に選択肢

患者のQOLに大きな影響を与えるリンパ浮腫だが、発見が遅れるケースも多く限定的な治療しか行えない病とされてきた。しかし、これまでリンパ浮腫治療の中心的役割を果たしていたリンパドレナージ、圧迫療法といった保存的治療に加え、リンパ管静脈吻合術、血管柄付きリンパ移植、脂肪吸引などの外科的アプローチの選択肢が増えたことで、症状の改善が期待できるようになった。近年では画像診断技術も発達し、初期段階での発見、早期の治療が行えるようになり、積極的治療を選択する患者も増えている。

がん治療などで生じる二次性リンパ浮腫は、治療直後に発症することもある。術後10年以上が経過してから症状が現れることもある。単なるむくみと侮らず、早めに受診し適切な治療を受ける必要がある。

千葉

がん術後の手や脚の“むくみ”に要注意
先端手術と医療リンパドレナージでリンパ浮腫を改善

腕や脚にむくみの症状が出るリンパ浮腫は、主にがん切除後の後遺症として知られ、放置していると深刻な症状を引き起こす可能性がある。リンパ浮腫の治療に積極的に取り組む名戸ヶ谷病院の、菊池和希形成外科部長に話を聞いた。

がん術後の危険な“むくみ”

千葉県柏市にある名戸ヶ谷病院では、腕や脚のむくみなどの症状が出るリンパ浮腫治療に対し、高度な最新技術を複数組み合わせ合わせた包括的な治療を提供する専門外来を開設している。同院形成外科の菊池和希形成外科部長は、手術用ルーペや手術用顕微鏡を用いて微細な手術を行うマイクロサージャリーのスペシャリストだ。

リンパの流れが滞り、手脚がむくむリンパ浮腫には、生まれつき発症している先天性リンパ浮腫とがん手術後の続発性のものがある。かつては“不治の病”とされていたリンパ浮腫だが、治療技術の発達により制御できるようになってきている。

「時には先天性の場合も含め、多くの患者さんご自身がリンパ浮腫だということに気が付いていない可能性もあります」

乳がん、子宮がんや前立腺がんなどの術後に発症するリンパ浮腫は、手術直後だけでなく、治療後数年、十年以上後に症状が出始めるケースもあり、単なるむくみ、加齢によるものと放置してしまうことも少なくない。

「むくんでいるだけだから」と放置していると、腕や脚が熱を持つほど腫れ上がり、患部が生活に支障を来す蜂窩織炎を罹患することもあり、適切な治療が必要になる。

繊細な外科手術と複合的理学療法

リンパ浮腫に対しては、保存的治療と外科的治療が用いられるが、同院では、精密な検査に基づき治療方針を決定していく。わず

か0.3～0.5mmというリンパ管を5ミクロンほどの糸で吻合するデリケートで繊細な技術が求められる手術療法では、菊池医師の技術が光る。世界でも評価の高い東京大学附属病院で臨床経験を積み、スーパーマイクロサージャリー技術においては欧州各国で技術指導を務めるほどのエキスパートである菊池医師の下には、英・オックスフォード大など海外からの視察、研修の医師も訪れる。

圧倒的な技術力を持つ外科手術と合わせて、リンパセラピストによるリンパドレナージ、強圧ストッキングなどによる複合的理学療法を合わせたリンパ浮腫専門外来を設置している点も特徴的だ。リンパ外科専門医が浮腫所見を見ながら専門性の高い診療をチームで提供する。熟練の画像診断で適切な診断を下し、保存療法、高度な手術、リハビリなどの包括的な治療が可能な点は大きな強み。

「まず、地元にもこうした治療を受けられる病院があることを知ってもらおうこと。少しでも多くの人に高度な医療を提供したい」

古くから地域医療の担い手として患者の健康を見つめてきた同院は、2019年に現在の場所に新築移転を果たし、地域のかかりつけ医としての機能を維持したまま、「世界水準の先端医療を地域に」を掲げ、さらに進化を続ける。必要とされる医療を、高いレベルで常時提供する名戸ヶ谷病院は、地域医療の新たなあり方を先駆者として実践し続ける。



形成外科部長
きくち かずき
菊池 和希

2006年、鳥取大学医学部卒業。東京大学医学部附属病院では形成外科助教として世界最先端のマイクロサージャリー技術を用いた臨床を数多く経験。ローマ大学国際コンサルタント、旭中央病院での勤務を経て2014年から現職。

社会医療法人社団 螢水会
名戸ヶ谷病院
https://www.nadogaya.com/

【受付時間】 平日：7:00～16:30 土曜：7:00～11:30
【休診】 日曜・祝日 急患は24時間365日対応
〒277-0084 千葉県柏市新柏2-1-1 TEL.04-7167-8336

